北チリの旅

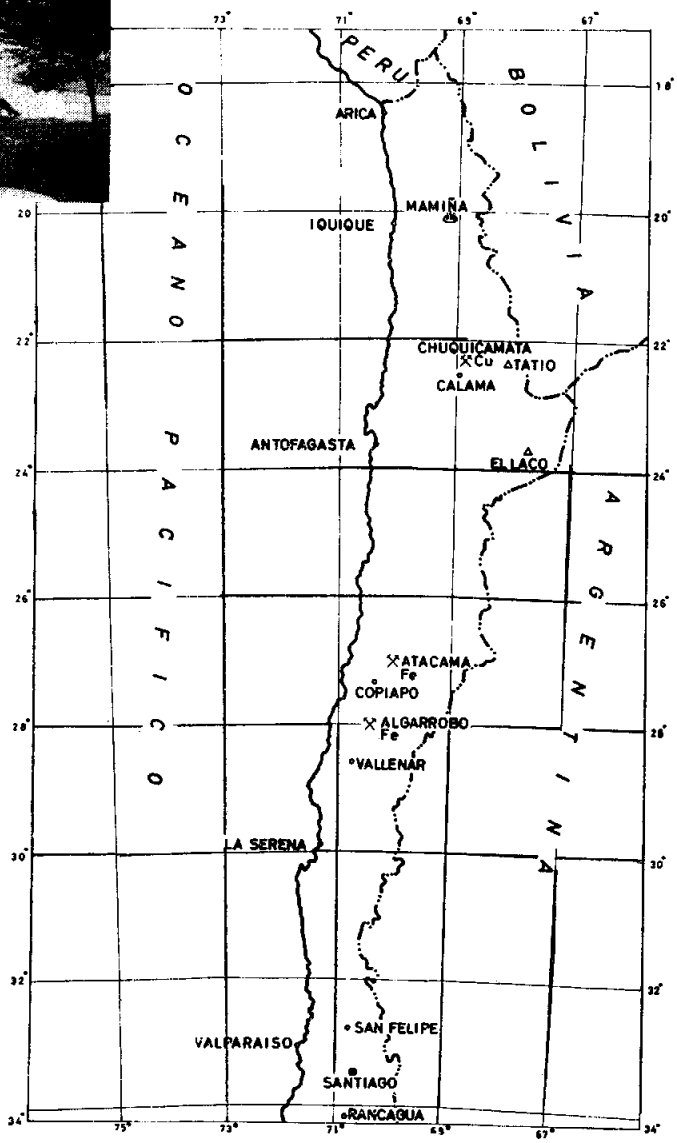
石川俊夫

サンチャゴ・サンタルチアの丘

≪サンチャゴ≫

九月末のサンチャゴは札幌のもっとも良い六月頃の気候で、しかもそれから日一日と暖かくなる旅行には好適な季節である。しかも毎日晴天で、一点の雲もない澄んだ青空の連続である。白雪を戴くアンデスの高い山なみを背景にし、緑の多いこの町は世界的に美しい都会の一つであろう。サンクリストバルの山上や、国連の中南米事務局屋上からの、この町の眺めの素晴しさはいまでも目に浮かぶ。三十年前、中国の北京の町を北京飯店屋上より見た、森の都の印象はまだ長く心に残る。並木の美しい街路、緑と水の公園は人工的な色彩豊かな東洋の建造物とともに、この都を北京の秋は世界一とうたわしめていた。

サンチャゴはアンデスという大きい自然



北チリの見学地の地理的位置

の要素を加えた素晴しさを持ち、樹林豊かな公園や街路樹に西欧風の教会堂など、荘重な建築物の調和の美しさを誇っている。住宅街では種々の色の花に彩られた広い芝生の庭園を持つ洋館が、それぞれの地区で特徴ある街路樹に飾られた、静かな通りの両側に、ゆったりとならんでいる。数年前、この都会に二年間住まわれた勝井博士夫人に、サンチャゴならば長く住んでもいいといわしめただけの趣があるところである。

人口三〇〇万の都会の中心商店街は、交通繁雑で、通りも幅狭く、喧騒で余り印象はよくない。この区画では、札幌のような秩序もなく魅力もない。しかし周辺に向って町は美しく落ちつきを加え、アンデスまで添えて、規模の大きい美しい都会を現出している。

≪スペイン語≫

チリに限らず、南米諸国は大体スペイン語が通用しており、チリにおいてスペイン語を語らずにチリを知ることは困難であろう。しかし、スペイン語を覚えることは簡単ではない。幸いにチリ大学の研究員として、北大の地質学鉱物学科を一九六二年に卒業した西村豪君が、一九七一年四月から留学している。

彼は山岳部の主任をした山男で、ゴンちゃんと愛称され、卒業後、一九六三年アマゾンの調査に出かけたのを最初として、以来もっぱら南米に過ごし、最近は一九七一年一～四月のアタカマ探険隊に調査員兼通訳として加わっている。スペイン語がうまく、多くのチリの友人を持ち、チリの元文部次官や前チリ大統領の女秘書など知合が多い。北大学生時代日本語では余り話の流暢でなかった彼が、一旦スペイン語を話し出すとにわかに生彩を帯び能弁となる。チリ人との間の複雑な交渉もまとまり、専門的なことも社会的なことも、チリの知識を豊かに吸収している。多数のチリの地質学者と面識があり、スペイン語の新聞を毎日よく読んで、政治、経済にもくわしい。

サンチャゴ滞在中、私はゴンちゃんのプールのある邸宅にお世話になった。この邸は郊外の静かなところにあって、庭からアンデスの山が見える。チリ人の友人が多いために、その世話でいい家を借りることができたそうである。書斎にはチリはもちろん南米の地質や山岳、探険に関係ある本が沢山ならべられて、彼の現在のチリ研究の意慾を示しており、頼もしく思われた。一九六五年より四回にわたる北大のパタゴニア調査隊にも参加し、そのとき使用したパタゴニア北大調査隊と側面に大きく書いた自動車で、いま町中どこでも走っている。まったく彼のおかげで私はスペイン語を全然知らないで、今度のチリの旅を楽しむことができ、またいろいろ細かいチリ大学との交渉もまとめることができた。

恭子夫人は結婚前、南米やチリの著書もある有名な地理学者で、また、デザイナー田中千代さんの御主人でもある田中薫博士の秘書を勤め、前から南米には関心を持っておられた。満一歳の光代ちゃんを中心に家庭はいつも明るく、チリ人のお客さんも多い。

≪サンチャゴからアントファガスタへ≫

十月一日、サンチャゴ空港を出発して北に飛ぶ。右側の窓から目に入る白雪を戴くアンデスの山々の姿はじつに素晴しく、とくに一きわ高くそびえる嵩高なアコンカグア（七、〇二一メートル）は圧巻である。いままでの空の旅で、これはかつてない感激であった。神々の座ともいえる高峯の集まりの神秘にして壮大な眺めの連続、私は三十分も目を離さず吸われていた。

十九日、北からサンチャゴへの帰途は最初ほどの感激はなかったが、今度は隣席のゴンちゃんが瞑想にふけるごとく、あるいは涙をこらえて泣いているがごとくこの山々の姿に魅入られていた。山が遠い故郷を思い出させたのか、また学生時代に何十回となく登ったなつかしの日高の山を恋しがらせたのか、数日のうちに日本に帰る私と対照し、一瞬、センチメンタルな気持になったためであろう。

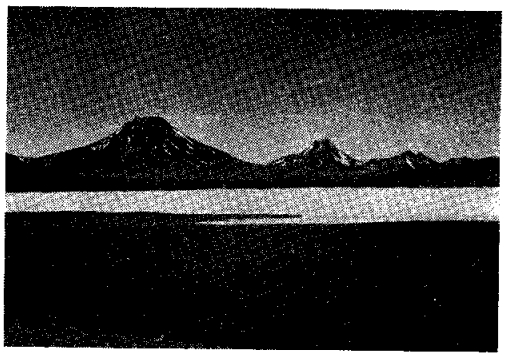
北に進むに従ってアンデスの山は低くなり、目を窓下に転ずれば、これはまた広大な沙漠の展開である。こんなに広い低い土地が、ただ砂におおわれている。よく見れば丘あり、谷ありのくっきりと微細な彫刻がほどこされ、地形学の教科書のごとき興味を覚える。

サンチャゴより北一、一〇〇キロのアントファガスタにはチリ国内航空（ラン・チレ）の飛行機で二時間かかる。一旦海上に出て、空港に下降して行くときの海辺の沙漠の断面に見える基盤岩の層理が鮮やかである。沙漠に開かれた空港風景が珍しく感じたが、北部チリの空港はみな沙漠の中にある。

アントファガスタの町は空港から約三十分の山を背負った山麓の港町で、チリ硝石や銀、銅、鉄など鉱産物の積出港としてひらけ、夜景が美しいところである。海岸にあるホテル・トリスモは広壮な建物で、裏庭は海岸につづき、岩礁の上にたくさんのペリカンやカモメが群がっている。動物園でしか見たことのないペリカンの自然の生

態ははじめての見物であった。

チリでは土曜、日曜が休日で、ジープの運転手の出勤はたのめないので、エル・ラコ火山には四日、月曜に出発することにし、その間、二日間休養することにした。チリは食物が豊富で、ホテルの食堂も街の料理店も美味な食事ができて楽しい。朝食は、コーヒーにパン一片という簡単なものであるが、昼食は夕食と同様に濃厚な料理と葡萄酒が出て、胃腸の負担を重くする傾向もある。従って夜は九時頃から夕食、六時頃はまだお茶の時間である。ホテルの食堂など、夕方はまだ食事の準備はできていない。日本から遠くはなれて、地球のその裏側で、日本でも得難い二日間の完全な休養は貴重な恵みに思えた。



沙漠の中の塩湖と火山

≪エル・ラコ火山の道≫

十月四日早朝、アントファガスタ地質調査所のアルファロ技師がジープの運転手と一緒に迎えに来て、六時には、エル・ラコに向って出発した。チリの朝食は簡単なので、早朝でもホテルでは準備してくれる。天気はもちろん青空で、この季節に北チリでは、天気の心配はなく、雨具はまったく不要のものである。海岸を離れ、斜面を上ると、平坦広大な沙漠に出る。砂におおわれた山や丘が諸所残っているが、道は平坦な砂原の中を疾走する。道の両側には遥かにところどころ古い土造の家がならび、平頂の台地のようなズリ山が見える。これらはチリ硝石鉱山の跡で、昔の硝石鉱業の栄華の名残りである。

チリ硝石は中学校の地理で教えられたチリの代表的産物の一つであったが、いまはほとんど採りつくされ、いまでも稼業をつづけている鉱山はきわめて少ない。沿道に宿場のように残っている古いこわれた家屋の集まりは、むかし硝石鉱業の盛大な頃、鉱山地帯の交易場の部落跡と思われる。この社会にだけ通用された貨幣があり、アントファガスタ地質調査所の副所長から記念にもらった貨幣もその一つであった。

カラマはアントファガスタより東北約二〇〇キロ、沙漠のオアシスにひらけた町で、いまは二、三万の人口を有し、空港もあり、ホテルもある。町の周辺部には土造の家が多く、町の商店も通りに軒が長く突き出たその奥にあって薄暗く、三〇年前旅行した中国山西省の黄土地帯にひらけた町を思い出させる。物資は豊富で、エル・ラコの山で食べる食料をじゅうぶん買い込むことができた。この町は標高すでに海抜二、三〇〇メートル、ほとんど平坦な道を走っていると思う間に、二時間で大雪山の旭岳より高いところに上っていたのである。

カラマから東南一〇〇キロのサン・ペドロ・ド・アタカマまで高さの変化はほとんどないが、沙漠の果てに連なる火山の美しい姿がだんだん迫って来て、楽しいドライブである。サン・ペドロも沙漠のオアシスにひらけた部落で土造の家屋が多く、インカ系の土着原住民も少なくない。この部落は何百体のミイラがところ狭く陳列され、無料で公開している博物館があることで有名である。ロンドンの大英博物館で、立派な棺におさめられたエジプトのミイラに比し、観覧者の身体に触れそうなほど無雑作に置かれているミイラは、生々しく強い印象を与える。人類学者、考古学者の来訪とともに観光客も多い。

ここでは広野の果てに火山の姿が青空にくっきり鮮明に浮き上がる。とくにリカンカブール（五、九二一メートル）の円錐成層火山は美しく、食堂からこの火山を真正面に見るように建てられた観光ホテルは黄色の花をつけた樹林に囲まれた別荘式小館をならべて、古い部落の陰影とはいちじるしい対象を示している。

この部落から南々東四〇キロのタコナオ部落までは平坦であるが、このさきには部落はない。沙漠の中で緑の樹林と水の流れを見たとき、そしてそこに人の住家をみたときの安心感は、青山清流に恵まれ過ぎている日本のみに住んでいては分からない。その有難さを気づかないでいるうちに、それを失う恐れがある。日本を遠くはなれて日本の緑多く、水清き自然の恵みをしみじみ思う。羊飼いの家がある小川のほとりでロースト・チキンとジュースで昼食をとった。

サン・ペドロ・ド・アタカマからエル・ラコまでは約二〇〇キロ、平坦な沙漠を無人の境を行くごとく邁進するが、タコナオから奥は山の端をめぐり、谷を巻き、塩湖に群れ遊ぶフラミンゴを見、溶結凝灰岩の広大な台地上を、白雪を戴く火山錐の排列

を真近にうっとりと眺めながら走った。いつしか山の高度三、五〇〇メートルを越す頃、頭は重く、胸の気分も悪くなって来た。四、〇〇〇メートル以上の高地に海岸から一気に上ったせいで、いわゆる高山病にとりつかれ、終点では身体はだるく足はフラフラで、ジープから皆にかつぎおろされる醜態と相成る仕末であった。かくして海抜四、三〇〇メートルぐらいの山小屋に落ちつかない一夜を過ごしたが、いまはすべて楽しい思い出である。

エル・ラコ（五、四七〇メートル）は安山岩の火山であるが、その一部に磁鉄鉱の小山があることが一九五八年に発見された。鉄鉱を採掘しようとして鉱区権をとった会社がその近くに石造の宿舎を建て、原住民の一家族が番人をしていた。いつもチンチラを抱いている親爺は愛想がよく、別れ際には一掴みの小石を皆にプレゼントしていた。磁鉄鉱の小山は高度四、七〇〇メートル、小屋からも見える近くに在り、翌朝なんとか元気を回復してこの山に上り写真を撮ったり、標本を採集したりして、遠くここまで来た目的を達した。遠くから見ればまったく黒色玄武岩の鉱滓状（アア）溶岩そっくりで、表面部は気孔に富み多孔質で、ガスの抜けたあとの管状の空洞壁には磁鉄鉱の良晶が多数発達し、その成因こそ興味ある問題となっている。鉄鉱が溶けて溶岩のように流れ出したものとすれば、世界的に稀れな現象である。

知床硫黄山一九三六年の溶融硫黄流、最近起こったアフリカ東部の火山の溶融炭酸塩岩流とともに、世界火山学界の三不思議である。知床硫黄山の硫黄流は前にできていた硫黄が活動時の火山の熱により再び溶けて流れたものと考えられるが、エル・ラコの磁鉄鉱流も地下の鉄が、再び溶けて流れたものかも知れない。学術的には貴重な現象の産物であり、世界的天然記念物として長く保存したいものである。

≪エル・タチオ火山≫

十月七日、地熱エネルギー委員会のラーセン地質技師、西村学士、運転手と四人で朝九時半カラマのホテル・オストリアから出発し、二日前に通ったサン・ペドロ・ド・アタカマを経てエル・タチオ火山に向った。このコースはエル・ラコへの道とは反対に北々東に約七五キロ、かなり急な上りがあったり、谷に下ったり、道は単調ではなかった。溶結凝灰岩の台地上を東方に高度四、五〇〇メートルないし五、五〇〇メートルの円錐状火山の排列を眺めながら走る気持は爽快である。日本も火山国であるが、緑のない沙漠や砂礫のみにおおわれた広大な台地上に、緑のない火山錐のならびそびえる火山景観は、日本で見られないまったく異質の美しさを感じさせてくれる。時に野生リヤマの群に遇ったり、雪融けの水の流れを横ぎったり、名も知らない沙漠の植物を見たり、大自然の中の静かな旅であった。

午後四時頃、エル・タチオ火山の麓にある地熱エネルギー委員会の宿舎に着いたが、海抜四、五〇〇メートルくらいの高山でも、最初エル・ラコで高山病の洗礼を受けたおかげか、気分はじつに快適である。高山病は、チリの火山調査で一度は受けるべき試練であろう。

エル・タチオ火山（五、三一四メートル）はボリビアの国境に僅か一〇キロのところに、南北にならぶ数峯の円錐成層火山群で、北端の峯をセイロ山と呼んでいる。セイロ山に接して間歇泉の谷があり、間歇泉、温泉、噴気孔、湯沼、泥地獄が活動している。古くより知られ、チリ第一の地熱発電候補地として国連の企画で、ニュージーランドの地質学者ヒーリーの調査が行なわれた。一九六七年より地熱開発のボーリングが試みられ、深度六〇〇ないし七〇〇メートルの試錐六本は良好な結果を得た。現在海抜四、二八〇メートルのこの間歇泉の谷で一五〇—四〇〇度の高圧の高温蒸気が確かめられ、一号井は常時猛烈に噴気している。

現場に勤務する技術者、労務者は六〇人で、寝室、食堂、シャワー、水洗便所、娯楽室などの設備はよく整い専門の料理人、給仕人が毎日献立を変えて町の料理店同様な料理を提供している。三週間の勤務、一週間の下山休養の制度で、四、〇〇〇メートル以上の高山で働きながらも快適な生活を楽しんでいる。ここには人間尊重の精神がある。あくまで澄みきった青空の下、爽やかな高地、美しい自然の中に、湧き上がる心の喜びがある。

≪マミニア温泉≫

エル・タチオを下りて再びカラマに、カラマから飛行機でアントファガスタ、アントファガスタから空路北四〇〇キロ、ペルーの国境に近いイキケに向う。イキケは往時漁業で栄えた北海道の江差のような町で、いまでも昔の栄華を語る豪奢な古風の建物が残っている。こわれたままの古い建物も介在して、いまは落魄の身をかこっているかのごとき町である。この町から沙漠を横ぎって東方約一二〇キロのマミニア温泉までは定期の交通機関はなく、温泉所有の一五人乗バスの都合いかんによって大体三日に一度ぐらいの便があるだけで、それ

もイキケに来てみないと分からない。不便なようでもあるが、むかしの日本の温泉湯治に出かけるときのフンイキに似て、なつかしくもある。

マミニア温泉は三、〇〇〇メートルぐらいの標高に上った沙漠の谷間に天然に湧出する五四度のアルカリ泉で、数棟に分かれた宿舎の各室のバスルームに引湯し、野外には温泉プールがある。常時、数十名ないし百名くらいの浴客があり、食事やお茶の時間には一同食堂に集まって談笑しながら食べる。食間には隣の沢の泥浴場に出かけたり、サボテンだけが生えている沙漠の道を散歩したり、マミニアの古い部落の朽ちた教会の前の広場でおしゃべりを楽しんだり、日本のような共通の大浴場こそないが、かつての日本の湯治場のような、のどかな気分に満ちている。日本ではホテルが建ちならび、レジャーを楽しむ温泉地が多くなったこの頃、かえって外国のチリで日本の古い湯治形式の温泉を見出したことを面白く思った。

二泊の静養をしてイキケに戻ったが、従業員のストライキで大きいホテルは泊れず、町中をさがしてやっと一つの古い旅館に泊った。屋根には穴があき、室には錠もなく、もちろん食堂、洗面所もない、おそらくイキケ殷盛時代の旅館がこわれたまま残った遺跡のようなものであろう。江差にはこんなところはないが、これもチリでの一つの話の種である。老醜を混じた古い町に反し、海岸の街路、建物は清潔に美しく、空港に近い海水浴場、ホテル、娯楽施設は近代的に整って、イキケには二つの町があることを感じる。

≪コピアポ≫

イキケをチリの旅の最北にして、十四日飛行機で南約七八〇キロのコピアポ市に飛び、日本人の経営する鉱山としてはチリで唯一つの三菱鉱業のアタカマ鉄山と、同じ型式の鉄鉱床で、規模の大きい有名なアルガローボ鉄山を見学した。沙漠の中に巨大な口を開いた露天掘りの採掘場は日本では見られない異様な風景でもあり、また素晴しく能率的な生産でもある。従業員の数は少なくて、出鉱が多く、施設も小さい。日本のように広い山林を伐採する必要もない。

沙漠にもいろいろの花が咲いている。ノトロ湖のサンゴ草のように、赤いジュウタンを敷いたように見える花もある。近づくと、一つ一つの花は可憐な淡紅色の花である。沙漠で花を愛でながら、自分達だけの自然のような錯覚を感じてくる。この美しい花をとくに見ようとする人もないほど人は少なく、自然の多い北チリの旅を、いま楽しく貴重に思っている。

（北大理学部教授）